報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	長坂 契那
主 論 文 題 名 : 観光をめぐる近代日本の表象に関する歴史社会学的研究 —探検紀行から旅行ガイドブックへ—				
(内容の要旨) 1 本研究の目的と分析方法 本研究は、観光をめぐる日本の表象を歴史社会的に探ることを目的とする。特に、現代の外客誘致の際に依然として使われている「古き良き日本」の姿の起源が何であるかを明らかにする。その際に、アーリの「観光のまなざし」を手掛かりに、海外からの日本へのまなざし、それを受けた日本の自己表象といったまなざしの双方向性による重層性を描き出す。そしてそれがどのように形成されたのか、どのように外客誘致の際に利用されていったのかを文書資料を用いて検討する。その際の資料として用いるのが、英文旅行ガイドブックである。 本研究で扱う「旅行ガイドブック」は、海外で作成された旅行ガイドブックと共に、日本が『公式案内』として作成したものも検討する資料の中にも含めるものとする。外国人だけでなく、彼らを受け入れる日本人たちが自ら作成した旅行ガイドブックを含めることによって、作り手の多様性が生まれる。それによって、分析の際に「ゲスト」だけでなく「ホスト」も含むことが可能になり、よりまなざしの双方向性や重層性が明らかになることが期待できるのである。そして、外国人向け旅行ガイドブックを資料として使用することによって、観光という文脈で利用される日本の表象の歴史的な形成過程を追うことが可能になる。 それでは、本研究における分析対象としての旅行ガイドブックを、どこから検討すればよいのだろうか。その手がかりとして、イギリスのジョン・マレー社 John Murray による <i>A Handbook for Travellers in Japan</i> シリーズ(以下、HTJ)の存在がある。ジョン・マレー社の旅行ガイドブックは、そのシリーズの特徴である赤い皮装丁で小型の辞書ほどのサイズと分量を持った小さな百科事典のようであり、広範囲の分野を扱い、精密な地図までもが添付されていた。 ただし、旅行ガイドブックの系譜は、HTJ を起点にすればよいというものではない。それ以前にもまた、留意しなければならない存在がある。それは、HTJ の情報源となった著作や論文、旅行記である。特に、19世紀半ばに日本や朝鮮半島、中国大陸を旅した女性旅行家イザベラ・バードの著書が HTJ に先立つ 1880 年に『日本奥地紀行 <i>Unbeaten Tracks in Japan</i> 』を始め、ジョン・マレー社から多数の旅行記を出版している点は非常に重要である。 イザベラ・バードとジョン・マレー社との関係は、後の HTJ にも多大な影響を及ぼしている。日本の英文旅行ガイドブックの誕生は、こうした「探検」を行った外国人たちによる「紀行」が原型ではないだろうか。本研究ではこうしたイメージに基づいた、旅行記に代表される記録を旅行ガイドブックの現段階として「探検紀行」と呼ぶ。イザベラ・バードの『日本奥地紀行』に代表される旅行記は、まさに「探検紀行」と呼ぶに				

ふさわしいと言える。本研究では特に、この点に着目して考えてみたい。本研究では、外国人向け旅行ガイドブックの歴史社会的系譜を、「探検紀行」から「旅行ガイドブック」へと仮定する。そして、観光という文脈における日本の表象がどのように形成され、まなざしの交錯によって変化していったのかを明らかにする。

2 本論

第一章の「最初期の外国人向け旅行ガイドブック」では、最初期の幕末期から明治中期までの外国人向け旅行ガイドブックを検討し、「旅行ガイドブック」の再定義を行った。19世紀後半に欧米で一世を風靡したイギリスのジョン・マレー社は、後に日本版の旅行ガイドブックを出版することになるが、第一章ではそれ以前の外国人による日本旅行の状況を整理した。最初は商用や宣教、教育のために短期滞在しないし居住する外国人のために、まず日本に到達するまでの船舶情報を充実させ、開港地や外国人の立ち入りを許可された土地を単独に扱った非常に範囲の狭いものが製作された。次に、その都市内の外国人たちにとって安全かつ最低限の生活レベルを保証できるか否かの情報が掲載された。最後には、日本が世界一周旅行の寄港地に組み入れられ始めた頃に、ある程度の範囲を持った国内旅行ルートが確立した。これにより、旅行者の動線が点から線へと変化していく過程が読み取れる。世界一周旅行用に薄くて小さなサイズと簡潔な内容、横浜から東海道で大阪、京都へ、そして神戸で出港というルートが確立した。ここで明らかになったのは、旅行地としての日本の成立だけではなく、いわゆる19世紀後半の「旅行の大衆化」とマス・ツーリズムの成立は、外国人の日本旅行の始まりとは重ならないという点である。むしろ、中流階級に爆発的に普及した安価な大人数での団体旅行であるマス・ツーリズムに逆らう形で知識人、上流階級、商人たちといった人々が日本を旅行していた。つまり、初期の旅行ガイドブックの存在は、彼らの世界、欧米の富裕層や知識人の文化圏に初めてその存在を認知されることを意味していたのである。

第二章では、「探検紀行から旅行ガイドブックへ」と題し、明治中期の1881年から大正初期の1913年まで出版されたイギリスのジョン・マレー社のHTJ全九版を検討し、そこでまとめられた日本像を明らかにした。これは、欧米からのまなざしを向けられた結果、日本が最初どのように表象されたのかを示している。ジョン・マレー社は、1836年に詳細かつ広範囲で専門的知識に基づく旅行ガイドブックを製作しベストセラーとなった。日本版であるHTJを執筆したのは、初版、第二版は外交官のアーネスト・サトウとホーズ、第三版から第九版の最終版は、チェンバレンとメイソンの二人であった。サトウとチェンバレンは、共に外国人による日本研究である日本学の始祖であり重要人物として現代でも評価の高い人物である。彼らはHTJの執筆の際に、先だって日本国内を旅したイザベラ・バードと交流し、情報交換を行っている。バードに代表される、外国人による日本国内旅行の記録は探検紀行と定義づけることができる。バードの執筆した『日本奥地紀行』は、HTJの制作に大きく影響を与えている。それに加え、サトウやチェンバレンの行った日本学の蓄積もまた、大きな影響を与えている。探検紀行は、外国人たちによる日本学の蓄積を経て、HTJという旅行ガイドブックへと変化したのである。それによって、大きな情報の変化があった。まず、欧米の文化圏にとって未知の存在であった日本を発見した外国人たちが自らの言葉で記述したという点である。これが探検紀行の誕生である。次に、それらの蓄積と調査、分析が加わることによって、日本学が形成された。そして、その探検紀行と日本学を旅行ガイドブックという書籍に一冊に集約させたのである。しかし、留意すべきは、HTJを執筆したサトウやチェンバレンは典型的なオリエンタリストであり、探検紀行も日本学も極め

てオリエンタリズム的な視点に立脚したものであったという点である。HTJのキーワードとして浮かび上がってくる「オールド・ジャパン」は、オリエンタリストたちにとっての理想郷である開国、維新の間もない若き日本の姿への懐かしさであった。しかし、旅行ガイドブックとして日本の情報が集約されることによって、欧米の文化圏に体系的に日本が把握されることになった功績は大きい。それと共にHTJを模倣、剽窃、引用する類書が横行したが、その中に外国人旅行者を歓迎する喜賓会も入っていたことは重要な点である。オリエンタリズムの対象であったはずの日本が、外客誘致にHTJを利用するようになったのである。つまり、「オールド・ジャパン」への懐かしさを日本の原風景への賞賛として読み換えが行われた。これが現代につながる観光をめぐる日本表象の始まりである。HTJという旅行ガイドブックの誕生は、探検紀行からの欧米からのオリエンタリズム的なまなざしを巧みに肯定的に読み換えた大きな転換点であると言えることができる。

それだけの影響力を持ったHTJも、ジョン・マレー社の旅行ガイドブック部門の売却により1913年の第九版の出版を最後にその姿を消した。それと入れ替わりに登場したのが、日本初の「公式案内」である『東アジア公式案内』*An Official Guide to Eastern Asia* 全五巻(以下OGEA)と、アメリカで出版された『テリーの日本帝国案内』*Terry's Guide to Japanese Empire*(以下TGJE)である。第三章では、「公式案内の誕生」と題し、特にOGEAに注目し、その成立背景を追った。欧米に発見され、知的側面から評価された日本が、今度は自らの旅行ガイドブックを欧米向けに作成したことは、まさにまなざしの逆転と利用と言えるものであった。そこで重要な背景となるのが、日露戦争の勝利によって得た大陸の足掛かりの最たるものである植民地と鉄道網だった。それらは外貨の獲得や外客誘致はもちろん、着実に大陸へ勢力を伸ばしつつある日本の植民地国家の国民国家形成の意図の反映であった。同時に、「公式案内」の名を冠した旅行ガイドブックが当時他に類を見ないこともまた、当時の制作者である鉄道院の並々ならぬ対外政策に対する意気込みが伝わってくる。また、OGEAはそれまでの欧米による旅行ガイドブックに見られたオリエンタリズム的なまなざしを反転させ、ゲストに対するホストの優位性を示した。同時に、かつて受けていたまなざしを今度は植民地や周辺地域に向けるようになった。旅行ガイドブックは「国」としての真正性を自負し、それを欧米中心の国際社会に示す鏡として政治的に利用されるようになったのである。そうした一連の動きには鉄道院初代総裁の後藤新平という強力なイデオログの存在が貢献していることも重要な点であり、観光という新たな産業と政治との結合が顕著な表象のテキストと見ることができる。欧米から向けられ、知的側面から評価されたまなざしは、今度は受け手である日本によって逆用され、当時の野心的なイデオロギーに利用されていたのである。

第四章では、1914年から1933年まで出版が確認できるアメリカのヒュートン・ミフリン社のTGJEと1933年に出版された鉄道省国際観光局の*An Official Guide to Japan*を事例に、更なるまなざしと「公式案内の展開」を追った。特に、TGJEに見られた芸者と吉原の記述を日本側のものと照らし合わせていくことによって、新たなまなざしの交錯と変容が見られた。既に、HTJによって日本の基本的な情報は発見され評価されつくされていた。そこで、更に魅力的でエキゾチックな要素を求めて、外国人たちのまなざしは芸者と吉原という格好の対象を発見したのである。ここで留意すべきは、芸者の存在が、「公式案内」には掲載されなかったことと対照的に、日本へのイメージをかきたてるための外客誘致パンフレットに伝統的な日本文化の担い手として掲載されるようになっていった点である。芸者の存在を「公式案内」には掲載せずに、日本に興味を持ってもらうための外客誘致パンフレットでは積極的に利用するという日本側の巧みな

まなざしの操作が垣間見られるのである。ここでは、かつての知的側面から発見され評価された日本が展開した自己表象が、今度は異なる側面からのまなざしに対して巧みに操作しつつそれを受容して展開していく日本の意図的なまなざしの逆用を指摘できる。それはまなざしのせめぎ合いの結果の変容であると同時に、「公式案内」を用いた表象の逆用とも言えるものであった。

第五章では、1941年から1991年まで出版された「公式案内」を検討することによって、「公式案内の自己表象」に着目した。そして、まなざしの重層化によって日本の表象が変容していった上で、日本が自己を表象する際に用いたまなざしの再生産について検討した。その際、天皇と皇居をめぐる記述に焦点を当て、戦前から現代に至るまでの記述が閉ざされた神聖性を帯びたものから次第に人間的で開放的に変化していくことを明らかにした。特に、天皇は戦後民主主義的な平和の代弁者としての役割を担わされ、戦前から一貫して主張してきた平和の意味の変化に柔軟に対応してきたことが明らかになった。皇居も、単なる日本の首都を代表する観光名所としてだけではなく、天皇のイメージ形成に寄与すると同時に、イメージを具現化して提示する場となったのである。同時に、最終的に皇族を「見る」ことのできる観光名所としての意味づけが、外国人による賞賛によって行われている点も重要である。日本の象徴の居所である皇居が、今度は欧米の外国人の承認によって価値づけられたと言うことは、かつての日本の「発見」の際に用いられたロジックの反復と捉えることができるからである。そして、皇居がかつての神聖で閉ざされた場所から消費の対象である観光名所へと変貌していったのは、天皇像の変貌と重なっている。それは同時に、日本国の目指す平和の含意の変化の歴史であり、常に欧米を始めとする諸外国からのまなざしを意識したものであった。度重なるまなざしの交錯の結果、日本の表象は観光を通して平和の文脈の中で政治的に利用されるようになったのである。

3 考察

以上、第一章から第五章までの研究を振り返り、幕末期から1990年代初頭までの観光における日本の表象を追った。そこで明らかになったのは、欧米に発見され評価されたことによって誕生した観光をめぐる日本の表象が、欧米と日本双方のまなざしの交錯によって重層的に変化していく過程である。そして、その過程は探検紀行から旅行ガイドブックへと転化され、対外的に利用されるようになったという政治的な背景をも含んだものであった。その結果、「公式案内」という公的かつきわめて政治的な要素を含む旅行ガイドブックが誕生したのである。言い換えると、日本が外国人向けに作った旅行ガイドブックである「公式案内」は、自己表象を公的に権威づけることによって自らがまなざしの主体となり、欧米を中心とした国際社会からのまなざしを操作しようとする日本の意図の結果であった。

そして、本研究で明らかになった、観光をめぐる表象の力学とも言える関係も重要な視点である。日本は欧米から向けられるまなざしをきっかけに自己の表象に対して自覚的になり、「公式案内」を編んで積極的に自らをアピールするようになった。そして、そのアピールに対し欧米は更に異なるまなざしを向け、日本もそれに対応した自己表象を行った。その一連の流れを総括すると、観光をめぐる日本の表象は「古き良き日本」と「近代国民国家日本」、そして「民主主義国家日本」の三点であり、常に「国際平和」の名の下で表象されてきたと言える。これら三点の表象は、欧米のみ、日本のみでは成立せず、双方のまなざしの交錯と反応があったからこそのものである。そして、観光をめぐる表象の力学によって生み出されたものであった。そこには、驚異的から始まり、自負と共に脅威的、警戒的、優越的要素、そして友好的要素が多分に含まれているのである。その中でも、「古き良き日本」は、三つの表象の中で冒頭から現代まで一貫して使われている。

ここで重要なのは、オリエンタリズムの濃厚な「オールド・ジャパン」が、「古き『良き』日本」という日本にとって非常に耳触りの良い日本の表象として受け入れられたという点である。

「古き良き日本」の要素は、現代においても根強く外客誘致の際に用いられている。現代においては、「クールジャパン」と「古き良き日本」は対外宣伝における双璧をなしているといってもいいだろう。特に、現代の外客誘致における「古き良き日本」は、本研究の考察から明らかになったことを踏まえると以下のように理解することができる。それは国際平和、異文化交流の名の下で行われる経済政策や外交政策をソフトに覆い隠しポジティブに読み換えると同時に、脱政治化を目指すものである。

しかし、「古き良き日本」の表象を持ち出すことが、政策を覆い隠していることによって極めて高い政治性を帯びてしまうという結果をもたらす。同時に、「古き良き日本」はこれまで覆い隠してきた西洋中心主義や植民地主義といったイデオロギーを内包するものであった。つまり、「古き良き日本」を政策的に用いるということは、そうした政策もまたイデオロギーの残滓を引きずるものなのである。政策の作り手がこのような点に自覚的かどうかは、現時点で論証できるものではない。しかし、現状の表象の用いられ方を見る限り、無自覚である印象が否めない。そして無自覚に利用することが、イデオロギーの再生産に加担することになるのである。その便利さの恩恵を過去何度も受けてきた日本は、まさに「古き良き日本」の呪縛に足を取られているとすることができるだろう。そして、「古き良き日本」の呪縛は、その歴史と仕組みを正確に把握して自覚的にならない限り、今後も続くと思われる。

4 結語

本研究では、旅行ガイドブックを観光の現象を示す単なる情報源ではなく、観光をめぐる表象を読み解くためのテキストとして扱った。それは、従来の観光研究や観光学の中ではほとんど着目されていなかった側面である。本研究によって、旅行ガイドブックという資料の持つ観光学に留まらない学術的な価値を再発見し、テキストとしての可能性を拡張することができたと考えている。同時に、観光をめぐる日本の表象が本研究で明らかになったもの以外は存在たりえたのかについて考察することも重要である。本研究で明らかになった観光をめぐる日本の表象は、「探検紀行」、「旅行ガイドブック」の存在なくしてはありえないものであった。しかし、「公式案内」を経て現在の表象に至るまでには、様々な政治的、経済的、社会的要素が複雑に絡んだものであることは明らかである。これらの要素が一つでも欠けていたら、現在の形の表象はあり得たのだろうか。その答えは是かもしれないし、否であるかもしれない。そうした問いを常に続けていくことが現代への貢献につながるのではないだろうか。

表象の力学は、欧米と日本にとって意図せざる結果であったかもしれないが、ネガティブなものであるというわけではない。つまり、自己表象に対して、まなざしの交錯によって力学が働いた結果の生成物であるという自覚的な認識が重要である。自覚的な認識とは、何が正しい、間違っているという正誤を問うものでも決してないし、受け入れる、受け入れないという態度を問うものでもない。昔から当然あるといつの間にか信じてしまっていた自己表象の成立過程を知ることによって、自らの文化の表象に対して自覚的になることは、異なる表象に対しての理解の際にも重要なのではないだろうか。結果として従来と同じ表象を用いることになったとしても、自らの文化の表象について繰り返し再考を行うことが重要である。常に歴史との結節点や政治性を意識した上で異なる文化や対象に対峙することこそが、今後の観光政策や観光研究において忘れてはならないことだろう。